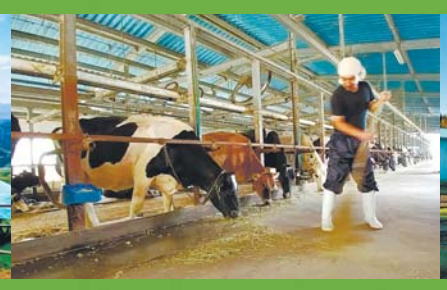
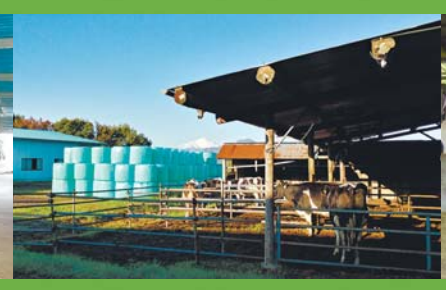
広　告

Rakunou no shigoto Interview

生き物から恵をいただく酪農の仕事を未来へ

フリーアナウンサー
唐橋 ユミ（からはし・ゆみ）さん

1974年生まれ、福島県出身。実践女子大学を卒業後、99年から5年間、テレビユー福島のアナウンサーとして活躍。その後フリーとなり、「サンデーモーニング」（TBS系）、ラジオ放送「語りの劇場グッとライフ」（NHK第一）など多数のテレビ・ラジオ番組に出演。趣味は料理、ゴルフ、相撲観戦など。利き酒師の資格も持つ。14年に著書「わたしの空気のつくりかた：出すぎず、引きすぎず、現場を輝かせる仕事術」（小社刊）を上梓。

×

酪農家
富澤 裕敏（とみざわ・ひろとし）さん

1982年生まれ、群馬県出身。46年に祖父が戦後の開拓者として東吾妻町へ入植。父の代で酪農専業に。東京の大学を卒業後会社勤務を経て、実家の酪農を継ぐことを決意。30頭だった経産牛の増頭と長年使ってきた牛舎や機械の改修を進める。現在は経産牛約80頭を管理し、約35頭の育成牛を北海道内の2カ所の預託牧場に預けている。酪農教育ファーム認証牧場として、子どもたちを対象とした酪農体験や出張酪農教室を定期的に実施。また、全国の酪農家や学生たちとの交流やディスカッションを積極的に行っている。

酪農は日本の基礎的な第一次産業。野菜などの価格が高騰するなか、日本ならではの業界の仕組みにより牛乳や乳製品の価格は常に安定している。そんな酪農業界では次世代への事業承継や、酪農家の働き方改革が課題となっている。フリーアナウンサーの唐橋ユミさんが、群馬県東吾妻町（ひがしあがつまちで酪農を営む富澤裕敏さんに、酪農の仕事の現状や展望について聞いた。

命の恵を食料に変える生命産業 使命感持つ若手がバトンつなぐ

唐橋　高度成長期に積極的に展開されてきた多くの経営が世代交代期を迎えているなか、事業承継は日本社会の大きな課題です。まず、富澤さんが酪農の仕事を継ぐ決意をされた理由をお聞かせください。

富澤　休みなく働く両親の姿を見て、子どものころは大変な仕事だというイメージが強かったのですが、東京の大学を卒業後、社会に出て働くうちに酪農の仕事の尊さを考えるようになり、決意を固め11年前に事業を継ぎました。

唐橋　「仕事の尊さ」とは具体的にどういったことでしょうか。

富澤　メス牛が生まれて、その牛が母となって搾乳できるようになるまで、約3年かかります。子牛が生まれる瞬間もそうですが、育ててようやく搾乳できる時にも生命の大きなチカラを感じます。当牧場は牧草も栽培しています。大地の恵が牛を育て、その牛からいただく生乳（牛から搾ったままの乳。牛乳や乳製品の原料）を人々へ届ける、まさに「酪農は生命産業」だということが実感できる環境でした。

唐橋　今の牧場の起点となる酪農を始めたのはお父さんですか。

富澤　祖父が戦後の開拓でいま牧場のある場所で野菜づくりをしながら1頭の牛を飼い始めました。後を継いだ父が少しずつ頭数を増やしながら酪農専業として発展させました。二人が築き上げたこの仕事を途絶えさせたくないという気持ちも強かったですね。

唐橋　酪農は朝早くから夜遅くまで休みなく働くというイメージがありますが、仕事の大変さについて迷いはなかったですか。

富澤　たしかに両親の時代は家族のみで作業をしていました。親に遊んでもらった記憶や家族で旅行に行ったこともなかったので、事業を継ぐには働き方は大きな課題でした。一方で、いまの時代に合った省力化を図る酪農経営のやり方を実践したいという気持ちもありました。

唐橋　いま社会の流れは働き方改革ですから、時代にマッチした経営戦略ですね。改革は順調に進んでいるのでしょうか。

富澤　親の忠告にも耳を傾けながら、少しずつ機械化や外部の人の手を借りながら労働環境を改善しています。成果も出ており、いまは事業を継いで本当に良かったと思っています。

乳牛それぞれ個性があり 自然環境を相手にする仕事は繊細

唐橋　日本の農業産出額約9兆円のうち、畜産は約3分の1を占めて第1位でその4分の1が酪農（生乳）です。重要な基幹産業でありながら、酪農の仕事についてあまり知られていないように感じています。機械化も進んでいるということですが、酪農の仕事の現状を教えていただけますか。

富澤　労働環境の改善には機械化が欠かせません。当牧場でも搾乳機を導入し、昔のように重いミルク缶を毎日運ぶような過酷さはなくなりました。また従業員や海外からの実習生などの力も借り、交代しながら休みもとれるようにしています。ただ、生き物が相手ですから仕事は365日あります。毎日の餌やりや搾乳を休むわけにはいきません。乳牛が体調を崩したり、出産があれば昼夜を問わず世話をします。

唐橋　改革できることとできないことがあるのですね。お父様の経営方針の中で引き継いでいることは何ですか。

富澤　乳牛にはそれぞれ個性があり、父はその世話は家族でなければできないと考えていました。確かに個性を把握して体調を管理することは大切で、私も同感です。その上で、餌やりや搾乳は外部の人の手を借りても大丈夫だと判断しました。実際、乳牛に接するなかで、私たちと同じように愛情をもって世話をしてくれるようになります。また、父は地元で採れた餌を少しでも多く与えることにこだわりました。手間がかかり労働時間も長くなってしまいますが、乳牛のふん尿から作ったたい肥を活用できますし、景観の維持にも役立つので、牧草栽培は続けていくつもりです。

唐橋　体調管理や出産の他に、どういった作業に気を配っていますか。

富澤　栄養豊富な生乳は腐敗しやすく繊細です。常に冷却して鮮度を保ち、速やかに殺菌するなど処理をする必要があります。気温・湿度、季節や与える飼料によって風味も変わるので、飼料配合などにも気を配ります。いずれこうした仕事もAI（人工知能）の役割になるかもしれませんが、いまはまだ経験値や感覚が大切です。それと、乳牛に与える薬や草地に農薬などを使う場合にはいつ、何をどれだけ使ったか記録し、安全・安心を「見える化」しています。乳牛に愛情を注ぎ、乳製品を口にする消費者に対する責任を持つことも人間だからできることだと思います。

安全・安心な牛乳を安定的に届けるための 指定生乳生産者団体を通じた共同販売の仕組み

唐橋　愛情をもって生産された生乳はどういう流通を経て、製品として消費者の元に届くのでしょうか。

富澤　搾った生乳は空気に触れることなくバルククーラー（生乳冷却装置）に入れて鮮度を保ったまま保管し、「指定生乳生産者団体（指定団体）」がタンクローリーで各酪農家から集乳します。私たちは指定団体を通じて、検査や価格交渉、乳業メーカーへの販売を共同で行うので、酪農家はおいしい生乳づくりに専念でき、消費者は安全・安心な牛乳・乳製品を安定的に確保できます。

唐橋　野菜の価格は高騰するときがありますが、牛乳や乳製品の価格は安定しているのはそうした仕組みがあるからでしょうか。

富澤　生乳は乳牛から生産されるため、その量は日々変動します。共同販売を行うことで、酪農家同士で補い合って需給を調整し、価格の安定に努めています。さらに、指定団体が輸送や検査を効率的に行うことでコストの削減を図ることもできます。海外では需給状況に応じて、乳製品の価格が短期間で乱高下しています。

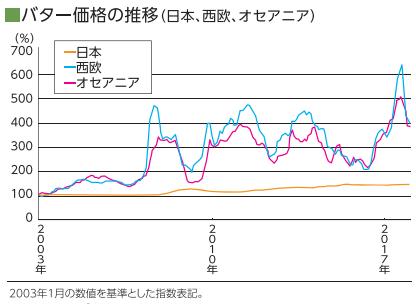
唐橋　子どものころから親しんできた牛乳や乳製品の安全性や価格の安定がそうした取り組みで守られてきたことを初めて知り、とてもうれしく感じました。ところで、牛乳の自給率はどのくらいなのですか？

富澤　牛乳は国産100％です。国内の生乳需要量のうち、約3分の1を乳製品として海外から輸入していますが、長期的には世界の生乳需給はひっ迫すると見込まれています。

唐橋　食料安全保障の観点からも国内自給が重要だと思います。

富澤　酪農は生命産業であるがゆえ、大きな設備投資が必要となり、労働時間も長くなってしまいます。とてもやりがいのある仕事ですが、新規に参入したり、廃業した農家が再開したりするのは非常に難しいのです。そのことを消費者にも知ってほしいと願っています。

■バター価格の推移（日本、西欧、オセアニア）



2003年1月の数値を基準とした指数表記。
参考資料:USDA「INTERNATIONAL DAIRY MARKET NEWS」、農林水産省「主要乳製品の大口需要者向け価格の動向」

地域活性による循環を目指し、酪農の価値を次世代につなぐ

唐橋　富澤さんは牧場に子ども達を招いての酪農体験、出張酪農教室などを実施されていると伺いました。次代を担う彼らに何を伝えていきたいですか。

富澤　当牧場では、地域の人々に協力してもらいながら子どもたちを対象とした酪農体験を実施しています。乳搾りなどを経験した子どもたちは、毎日飲む牛乳は大切な命の恵だということをきちんと理解してくれます。最近では、農業経験のない都市部の大学生からも牧場実習の申し入れが多くなるなど、酪農体験の成果が少しずつ現れ始めています。

唐橋　子牛が搾乳できる成牛になるまで時間がかかるよう、長期的な視野で経営ビジョンを描くことが大切ですね。

富澤　酪農には国土保全や耕畜連携による地域振興、教育の場としての機能など多様な役割があります。次世代の酪農家が夢を描けるよう、今後も他の若き経営者たちと協力しながらチャレンジを続けていきたいと思います。

酪農の価値（多面的機能）について

酪農業は単に牛乳や乳製品の原料となる生乳を生産するだけではなく、地域に根付き、循環型の持続可能な農業として様々な役割を担います。

●牛乳や乳製品の原料である生乳の生産

乳牛は人間が食べられない牧草や食品の残さなどを食べ、牛乳・乳製品の原料である生乳を生産します。

●乳牛の糞尿から作られるたい肥

乳牛が毎日大量に排泄する糞尿は、たい肥化され有効な資源として利用されます。牧草育成のためだけでなく、耕種農家が米や野菜を育てるための有機肥料としても使われます。また土中の微生物の餌となり土壌改良にも役立っています。

●耕作放棄地対策として

酪農業は耕作放棄地の有効活用にも寄与します。放牧地や飼料作物の作付地として利用するなど、里山の保全にも役立っています。

●教育の場としての機能

酪農は牛という生き物を中心とした農業であるという特性上、食やいのちの大切さを学ぶ場として活用する「酪農教育ファーム」等の活動が注目されています。

●地産地消への取り組み

近年は、酪農家が自身の牧場で生産した生乳をアイスクリームやチーズなどの商品に自ら加工し、直売所などで販売するケースも増えています。地域の住民と顔の見える信頼関係を構築しています。

一般社団法人 **中央酪農会議／指定生乳生産者団体**

http://www.dairy.co.jp/